

名作再読、拾い読み (17)

『宙ぶらりんの男』 ("Dangling man")

小澤 文彦

ソール・ベロー (Saul Bellow, 1915-2005) はアメリカの小説家・劇作家です。帝政ロシアから移住してきた貧しいユダヤ系移民の子としてカナダのケベック州モンリオール郊外にあるラシーヌで生まれました。幼年時代の大部分は、モンリオールの貧民街で過ごします。父親の事業が失敗したため彼が9歳の時、一家はシカゴに移りました。ここで初めて英語を身につけます。これ以後、彼にとってはシカゴが故郷となり、彼自身「生粋のシカゴ作家」を自認しています。1933年、大不況の最中にシカゴ大学に入学しますが、極度にアカデミックな雰囲気は性に合わず、ノースウェスタン大学に転入学します。そこで、トロツキー支持の社会クラブを創設して政治活動を始めました。実際、メキシコに亡命中のトロツキーには卒業後に会いに行くのですが、約束の前日に彼が暗殺されたため、果たせませんでした。政治活動をしながらも、社会学・人類学コースを優秀な成績で卒業し、その後、ウィスコンシン大学大学院に入学して人類学の修士号を取得します。

大学院在学中より執筆活動を始め、1944年、最初の長編小説『宙ぶらりんの男』を発表します。以後、ミネソタ大学、プリンストン大学、シカゴ大学、バード大学、ボストン大学などで教鞭をとりながら創作活動を続け、『オーギー・マーチの冒険』(1953)、『ハーツォグ』(1964)、『サムラー氏の惑星』(1970)で全米図書賞を三度受賞しました。その後、『フンボルトの贈り物』(1975)ではピューリッツァー賞を受賞し、1976年にはノーベル文学賞を受賞するなど、フォークナーやヘミングウェイなきあとの、アメリカ文学界を代表する作家と見なされました。2005年、マサチューセッツ州の自宅で亡くなります。89歳でした。

今回は『宙ぶらりんの男』を紹介します。入隊を控えた男の異常な心理状態を描いた作品です。

ジョウゼフは、27歳の背が高いハンサムな青年で、結婚して5年になります。愛想がよくて、大体において人に好感を持たれる性格です。アメリカ陸軍に入隊希望を出し、許可されたためアメリカ国内交通公社の職を辞して入隊に備えます。ところが、カナダ国籍であることや、結婚していることなどから、なかなか最後の手続ができず、待機させられています。物語は、7ヵ月もの間シカゴの下宿屋で待機しているジョウゼフが、元の職場に復帰願いを提出しても断られ、かといって別な職を探してもままならない、宙ぶらりんの状態から始まります。

彼は待機中の自由時間を、大いに読書して研

究論文の執筆に費やすつもりだったのですが、次第に本を読む気力がなくなり、それと同時に、冷静さを失ってきています。レストランで昔の仲間に会った時、相手から無視されただけで激昂し、友人が止めなければ喧嘩を始めるところでした。兄夫婦の家を訪問しても、失業中の自分に対する兄の優しい心遣いが煩わしく感じられ、素直な態度がとれません。彼に反感を抱いている姪から侮辱され、仕置きのために姪の尻を叩いて大騒ぎになります。

自分の生き方を求めて死と戦争について考え、自分の分身と対話する中で、宙ぶらりんの状態からどうすれば脱出できるか真剣に悩みます。そして、周囲のあらゆることに疑いの目を向けるようになります。

ジョウゼフは妻のアイヴァに不機嫌な態度をとるようになり、ある晩それがもとで激しい言い争いとなりました。その時、隣室のヴァナカー氏が煩く咳払いをし続け、トイレへ行ってドアを開けたままにしたので、以前から彼の激しい咳とトイレの水の跳ね返る音に苛立っていたジョウゼフは、堪え切れずに廊下に出て行って彼に抗議します。下宿人達が騒ぎを聞きつけて廊下に集まって来ますが、夜中に大声で騒いだことで、下宿経営者の娘婿はジョウゼフをたしなめます。それに腹を立てた彼は娘婿と口論し、もう少しで殴り合いの喧嘩をするところでした。これが原因で、ジョウゼフは立ち退きを要求されます。

下宿屋で騒ぎを起こした後で、ジョウゼフは徴兵委員会へ入隊を督促する手紙を出しました。そして遂に、彼宛に召集令状が郵送されてきます。

ほぼ1年間宙ぶらりんだ待機状態の後で、彼は自由を捨てて束縛に身を任せることになりました。「規則づくめの時間、万歳！そして、監視つきの精神にも！画一化よ、永遠にあれ！」という最後の言葉は、悲痛な思いの籠った自己放棄の表現として理解されるでしょう。

先行き不透明な現代にあって、状況は異なっているとしても、この小説に描かれているような宙ぶらりんの心理状態に共感を見出せるかも知れません。

参考文献

1. Saul Bellow "Dangling man" (Penguin Books, 1963)
2. ソール・ベロー著、太田稔訳『宙ぶらりんの男』(新潮社、1971)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)